昭和三十九年用（昭和三十八年九月現在）

# 窯業同窓会会員名簿

付 会誌 第七号

東京都目黒区大岡山一番地
東京工業大学内（窯業工場）
窯業同窓会
（振替口座東京一九六八五五番）
電話 東京（７２６）一一一一（代表）

## 故ワグネル博士について

大野政吉

今秋、十一月中旬を期して、ワグネル博士記念講演会開催の計画が進められております。これは、一部学生諸子および境野助教授等を中心として起された企てでありますが、まことに時誼を得たもので、私ども全幅の支持を惜しまぬものであります。

なにぶんワグネル博士物故後、すでに七十余年を経過した今日この、我が国工業並びに産業開発の偉大な恩人に対する思慕の念も、いつかうすらぎ、その名前さえ、耳遠いものになっているのではないかと思われます。

同博士の記念碑が縁故深い工大構内に立っていることは、御承知のことかと思います。これは博士の功績を永く後世に伝えるために、昭和十二年、故ワグネル博士記念事業会によって建てられたものでありますが、時の移るにつれ、とりわけ戦後人心の荒廃した中で、いつか、心ない侵入者の手によって損傷をうけ、陶製レリーフの博士像の顔の如きは、いたましい疵をこうむり、博士の略伝を記したブロンズ板も、盗難よけの被覆をほどこされたまま、辺りは雑草に埋もれて、たやすく近よることもできない有様になっております。この記念碑建設の意義も、あらかた没却されてしまったわけで、常々ひそかに心を痛めておりました。

聞くところによりますと、今回の講演会を期に、記念碑整備の件も考慮に上っておりますそうで、私どもこの記念事業の当初から参画した者にとりましては、まことに心あたゝまる朗報として何よりうれしく存じております。たゞ将来に再び煩いを重ねないよう、恒久的な修理を施すには、相当まとまった資金を要することかと思われます。つきましては、この際、大学当局とも充分話し合いました上、窯業同窓会（または蔵前工業会）が中心となって、この事業を推進してはどうかと思いつきました。いずれ、しかるべき機会に皆様におはかりして、具体策を講じたく存じますが、どうか御賛同あって、なにぶんの御支援をたまわりますようこの誌面をかりて、お願いする次第であります。

実はこの記念碑の地下には、ワグネル博士の詳しい伝記が記された陶管が埋められております。幸い私所蔵の「ワグネル先生追懐集」の中に、この伝記が掲載されておりますので、この機会にその全文をかかげて皆様のお目に入れ、半ば埋もれた先生の遺績を、世に現わす一助といたしく存じます。（八月記す）

## 陶管に記載せるワグネル先生略伝

勲三等ドクトル、ゴットフリード、ワグネル先生ハ西歴一千八百三十一年独逸国ハノーフエル州に生ル長ジテゲッチンゲン大学ニ学ビドクトル、フィロソフィーノ学位ヲ受ケ更ニ貧苦ヲ忍ビ仏国ニ往イテ研鑽シ明治元年三十八歳ニシテ我ガ長崎ニ来ル同三年鍋島藩ニ聘セラレ有田陶業ノ改良ヲ図リ始メテ酸化コバルトノ使用法ト石炭ヲ燃料ニスル法トヲ伝ヘタリ同四年鍋島藩ヲ辞シテ入京シ理化学ヲ大学東校及南校ニ講ス同六年墺国維納ニ萬国博覧会ノ開カルルヤ我ガ政府ノ嘱ニヨリ諸般ノ実地指導ニ当リ墺国モ亦先生ニ其ノ委員ヲ依嘱セリ当時我ガ国ハ未ダ博覧会ノ経験無カリシヲ以テ出品ノ蒐集ヨリ其ノ製作及包装等ニ至ルマデ挙ゲテ先生ノ指導ニ俟タザルモノハ莫シ乃チ同年二月ニハ横浜港ヲ出帆シテ維納ニ赴キ親ラ出品陳列等ノ指揮ヲ行ヒ且詳細ナル報告書ヲ作成シテ我ガ政府ニ献ジタリ先生ハ又七十余名ノ随従ノ者ヲシテ欧洲各国ヲ巡遊視察セシメ或ハ各自目的ノ場処ニ於テ工業技術ヲ伝習セシムル等斡旋尽力至ラザルナク独リ我ガ国ノ体面ヲ保持セルノミナラズ将来我ガ国産業ノ計路ヲモ会得セシメ我ガ国運ノ進展ニ寄与スル所頗ル大ナルモノアリタリ同七年帰朝後ハ勧業寮ノ設置ニ伴ヒ顧問トシテ各種ノ物品ニツキ多クノ試作ヲ行ヒ種々ノ技芸ヲ教導シ又別ニ七宝焼ノ研究ヲ企テ遂ニ世界ニ誇ルベキ製作ヲ創ムルト同時ニ東京開成学校及文部省製作学校ノ教師トナリ傍ラ東京博物館ノ設立ニ参画ス同九年米国政府ニ於ケル萬国博覧会開催ニ際シ再ビ其ノ嘱託トナリ各般ノ要務ニ鞅掌セリ特ニ先生ノ編纂セル出品ノ説明書ハ我ガ国固有ノ農工業歴史地理風俗等ニ及ビ精密ヲ極メ我ガ国ヲ海外ニ紹介セル好著トシテ普ク称讃セラル

越エテ十一年京都府ニ聘セラレ医学校ニ理化学ヲ講ジ舎密局ニ化学工芸品ノ製作ヲ指導シ陶磁器ノ新製法七宝琺瑯ノ着色法石鹼ノ製造法写真術等ヲモ実験シ之ヲ奨励シタリ同年多年ノ功労ニヨリ勲四等ニ敍セラル同十四年帰京シ東京大学ニ応用化学ヲ教授シテ専修学生ノ薫陶ニ力メ傍ラ硝子成分ノ算定法ヲ案出シ釉薬ト陶磁器ノ素地トノ関係ヲ試験シ終ニ無罍釉陶器旭焼(元ノ名吾妻焼)ヲ創製セリ又農商務省ノ依嘱ニヨリ陶磁器焼成窯ヲ改良シ其ノ他煉瓦焼成用ノ円形輪窯ヲ楕円形ニ改築シセメント耐火煉瓦燐寸等ノ製造ニ就キ実地指導ヲナシ亜鉛鍍金ノ簡易ナル方法ヲ発見スル等重要工業ニ関スル科学的研究ニ有力ナル指針ヲ与ヘタリ尚夙ニ実業教育ノ必要ヲ唱ヘテ国民ノ蒙ヲ啓キ同十四年東京職工学校ノ創立ヲ見タルハ実ニ先生ノ建議ニ基ケルナリ同十七年先生ノ主唱ニ由リテ同校ニ陶器玻瑠工科ノ設置セラルルヤ先生ハ其ノ主任者トシテ自ラ教導ノ任ニ膺リタリ是レ我ガ国ニ於テ陶磁器玻璃工業ヲ独立シタル一学科トシテ教授セル嚆矢トナス同校ノ染織科機織分科モ亦先生ノ唱道ニ由リ先生ノ歿後幾何モナクシテ設置セラレタルモノナリ右二科ハ実ニ現東京工業大学窯業学科並紡織学科ノ濫觴タリ同十八年以降農商務省ノ嘱託ヲ兼ネラレ先生ノ門ニ入ルモノ益々増加セリ同二十三年微恙ヲ得テ賜暇帰国スルニ際シ我ガ国ノ工業材料ヲ携帯シ彼ノ地専門家ニ其ノ適否ヲ批評セシメ或ハ各種ノ実業学校又ハ諸般ノ製造工場ヲ巡視シ其ノ他我ガ国ニ於ケル工業ノ進歩ニ資スベキ図書見本類ヲ蒐集スル等労苦ヲ意トセズ新文化ノ摂取研究ニ専念セリ同二十五年一月再ビ来朝復職シテ勅任官ノ待遇ヲ与ヘラル此ノ年春宿痾再発ノ兆アリシモ之ヲ厭ハズ登校授業ヲ継続セリ七月病ヲ塩原温泉ニ養ヒタルモ病勢衰ヘズ十一月初旬竟ニ危篤ニ陥ル特旨ヲ以テ勲三等ニ敍セラレ同月八日駿河台ノ自邸ニ於テ長逝ス享年六十二乃チ遺志ニヨリ青山ノ塋域ニ葬ル先生ハ資性温和謙譲ナレドモ意志甚ダ堅剛権威ニ阿ラズ耐忍精勤事ニ当リテハ成ラザレバ止マズ且子弟ヲ教育スルヤ懇切熱誠其ノ習フ所ニ非ザレバ伝ヘズ其ノ指教ノ料ト為スモノハ皆親シク試ミタルモノナリ而モ廉潔寡慾ニシテ私ヲ顧ミス屢々私財ヲ投ジテ研鑽ノ資ニ或ハ後進ヲ扶掖シ又時ニ巡遊シテ諸処ノ陶業ヲ視察シ其ノ作業ヲ指導啓発シ我ガ国工芸ノ伝統的妙技ニ至リテハ親シク巨細ニ調査シテ之ガ学理的根拠ヲ闡明シ後学ヲシテ益々修業ニ便ナラシメタリ又能ク英仏ノ書ヲ渉猟シ其ノ文化ニ精通スルト共ニ特ニ深ク我ガ国固有ノ美術工芸品ヲ愛翫シ古ノ名画ノ如キハ得ルニ随ヒテ之ヲ摸写セシメ何レモ其ノ精髄ヲ把握シ之ヲ新 作工芸ニ表現スルニ努メタリ其ノ他博物学人類学乃至我ガ国上古以来ノ度量衡及貨幣制度等ニ就キテモ著述セルモノアリ且講演ニハ常ニ日本語ヲ用ヒ衷心我ガ国ノ風土ヲ愛シ言動悉ク我ガ国ヲ稗益セザルハナシ斯ク先生ハ外国人タルニモ拘ラズ我ガ国新文化ノ揺監時代ニ於テ二十五年ノ久キニ亘リ粉骨砕身以テ教育及産業ノ開発達成ニ尽瘁セラル嗚呼先生ノ如キハ実ニ得難キ博学ノ人傑タルノミナラズ我ガ国新文化ノ恩人ト謂フベシ後年其ノ徳化普ク及ビ斯界ノ泰斗社会ノ重鎮タルモノ先生ノ門下ニ輩出シ我ガ国産業ノ興隆今日アルヲ致セルハ先生ニ負フ所寔ニ大ナリト謂フベシ

# 御挨拶

山内俊吉

昨年八月一日付で東京工業大学長を任期満了退官いたしましたが同窓の皆さんのなかで、まだ御挨拶申しあげていない方々も多く申訳なく思っていました。幸に今度新しい同窓会名簿が出来るので何か御挨拶したらとのことで、ありがたく御受けしてこゝにおくれながら御挨拶旁々所感の一端を申し述べさせていただきます。

思いめぐらしますと私が九州帝大を卒業し直ちに講師として母校に職を奉じまして以来今日迄三十有余年、その間公私にわたり同窓の皆さんから格別の御指導、御支援に預りつゝ、こうして大 過なく退官することが出来ましたことは誠に感謝の到りであります。

また退官に際しては記念事業会をとおして御手厚い御芳志を賜わり本当にありがとう存じました。

数々の御芳情に対し、ここに改めて深甚の謝意を表し心から御礼を申しあげる次第であります。

東京高工の学生時代から東京工大職員時代を通じ思い出は数限りなくありますが、その中からそのいくつかについて断片的に申し述べてみたいと思います。

先づ東京高工卒業の一寸前に関東大震災で蔵前から焼き出された時の思い出であります。その頃私は学友会の幹事をやっていましたが、校舎が焼けたので学生は各地の高工に分散するか或は一ヶ所にまとまって授業をつづけるかの論があり、学校は建物ではない、職員生徒からなる有機体である。分散は廃校に通ずるから不可であるという佐伯先生などの言葉が通り、東京帝大農学部

（駒場の現教養学部）を借り授業を開始することになりました。東京は焼野ヶ原です。学生達の下宿が心配になり、それを探したり、私設の寄宿舎づくりなどに奔走したが佐伯先生の友人矢島氏の熱意により立派な寄宿舎が用意されたことは当時としては本当にありがたいうれしいことでした。

次に職員として大岡山に赴任した時はバラック時代ではありましたが皆復興の意気に燃え、よく学びよく遊び最も楽しい思い出の多い時代で、私にとっては今でも何よりの慰安であります。しかし何といっても昭和九年本建築が完成し移転した時は震災当時の悲壮な思い出を辿り「母校再建成れり、万歳!!」の感がこみあげてきて何とも云えぬ嬉しさを覚えたことを今尚お忘れません。

さらに昭和十二年には中沢岩太博士が委員長で大野政吉本会々長がその推進役となって窯業の恩人ワグネル先生の記念碑が母校の庭に建てられ、内外の貴顕紳士の参集を得て極めて盛大な除幕式が開かれたことは窯業人の一人として大変うれしくかつ誇らしささえ感じました。

その頃から満洲事変が起り次第に戦争状態となり、各方面が活溌化し研究も漸く多忙になってきました。工業技術員養成所が出来たのもこの頃でした。その後太平洋戦争に突入し次第に物資の欠乏も目立ち、研究面にも大きくひびき多くの研究員を擁し活溌に動いたことや学徒動員、出征など苦しくあわたゞしい環境を今なお思い出すのであります。

この戦争中に近藤清治先生、つゞいて田端耕造先生を喪ったことは窯業学科発展のための一大損失で惜しみてもあまりある痛恨事でした。近藤先生御急逝のため平野耕輔先生が講師として窯業学科主任事務をとられ、私はその補佐役をしていましたが、昭和十七年頃から先生が研究所を計画され、非常な熱意をもって業界に呼びかけられ中村幸之助学長、大野政吉、浅野総一郎、森村市左ヱ門、西村直、黒田泰造、青木均一の諸氏その他十数名の方々の支援のもとに石井茂助事務官などと文部省と度々折衝され、昭和十八年二月窯業研究所が発足したことは特筆に値することで補佐役の私は親しくその熱意と実行力にうたれたのであります。

昭和二十年私が八木学長に無理に御願いして専門部に窯業科を加えてもらったのですが、第一回の生徒募集だけでその後は募集せず終戦後しばらくして他の科と一緒に廃止の運命となったのは残念でした。

終戦直後平野先生は御病気になられ、研究所の発展も見ず早川の自宅で逝去されましたことは残念の到りでありました。

終戦後しばらくして新学制がしかれ母校も改革のざわめきがひどくなりました。学科を廃止して新しくコース制をとったこともその一つでした。とまどいながらも諸委員会の熱心な活動により 次第に教育、研究両面とも軌道にのり、新制大学として落ちついてきましたが、未だ混乱期でありその余波が大学にも色々の形で波及してきました。しかしその度毎に論議を重ね進歩への段階を たどり立派な大学に成長いたしました。

昭和三十三年窯業研究所は建築材料研究所と併合し工業材料研究所として新発足することになりました。この所長に専任された私は母校に於ける最後の奉仕であると考え努力をちかったのでありましたが、一ヶ月後には学長に選任されましたので約一ヶ年兼任の所長事務取扱として新体制をとゝのえることに努力いたしました。

学長在任中にも色々のことがありましたが、一々ここに述べる必要もないかと思いますので皆さんに関係のある学科制をとったこと、八十周年記念事業のことだけにふれてみたいと思います。

就任の頃から漸く科学技術振興に伴い、これにたづさわる科学技術者の養成確保の問題がやかましく学生増募につぐ増募の施策がとられはじめました。これに伴い建物、設備などの不足、環境の整備、一般教育の教官の不足など色々の問題があり大変苦しい思いをいたしました。色々と対策をねり善処いたしましたが学生増募に対する施設、設備、教官などの予算増は文部省予算では学科基準になっているので学内処置のコース制では学生が増しても、どこを増したのかよりどころの学科がなく予算をどうつけるかわかりにくいので結局予算がつかず極めて不利であることがわかりました。そこで教育は従来のコース制をとり視野の広い教育をし管理運営の立場から学科制をとることに改めました。このため学科の新設、改組に基づく予算が確実につくことになり、可なり楽になったわけであります。

なお大学が非常に大きくなったので学長一本の運営を改めていくつかの学部或は公認の系にわけてそれに学科を配分して学部長又は系長制をしき運営を合理化したらとか、大学院を充実強化し研究所と協力して科学技術の最高水準をゆく研究教育の場の確保を図りたいなど色々のことも審議検討してもらいたいと思っていましたが、任期中には出来ませんでした。

また創立八十周年を記念し財団法人東京工業大学後援会をつくり大学に於ける教育面。物的不足を援助し又業界との協同研究の場として綜合研究館をつくりなどして母校将来の発展策を考えたのであります。しかしこの財団をつくる基金

がなくなやんでいた矢先、同窓の伊奈長三郎氏が私財をもって一千万円の大金を御寄附いただき軌道に乗り出したのであります。母校関係は勿論でありますが、窯業出身の私としては特に先輩のこの御支援が色々の意味で一段と身にしみてありがたく、何ともいえぬ感謝の気持で一杯でした。こうして財団申請の運びになったのですが、中々許可が出ず、免税まで許可を受けるには可なりの月日を要することが予想されたのでその計画の中の研究館の募金だけは一時切離してすすめることにいたしました。

これが現在の八億円目標で皆さんの御協力のもとに募金中で、宮川さんにも経理課長を御願いしています。これが完了し建物が出来あがれば初期の目的通り前記の財団である後援会が産学協同研究その他に関する運営に当り、財団の活動が大きくなる予定であります。

色々述べたいことは山ほどありますが、兎に角私といたしましては母校に於ける最後の御奉公であり、誠心誠意努力したつもりでありますが、御期待に沿い得ない点も多かったかと思います。ただうれしいことは卒業生の方々が各方面に奮斗して我国の産業を支え、活溌に動いておられる姿であります。私も元気を出して今後とも名誉教授として母校の発展のため、また世の為人の為に微力をつくしたいものと念願いたしております。

言葉には充分つくせませんが、長年に亘る皆々様の御厚情御支援に対し心から御礼申しあげ、併せて今後の変りない御交誼を御願いいたします。

最後に皆様並びに御家族御一同様の御多幸を御祈り申しあげます。

# クラス会及び同窓関係の会合

以下は会誌六号(昭和三十六年末発行名簿附記)以後の会合で連絡のあったもの又は編集者の知り得たことを簡単に記録した。

## 東海支部主催の見学会と懇親会

昭和三十六年十一月二十六日(日)午後二時に瀬戸市記念橋前市民会館に集合し、観光バスを利用して下記を見学した。

一、市民会館内陶磁器センター
二、陶芸家の加藤舜陶氏及び加藤釣氏(二十三年卒)陶房
三、品川白煉瓦(株)品野鉱山およびシャモット工場

東海支部よせ書

見学を終って瀬戸市鹿乗橋、白鹿館で懇親会を催し盛会埋に終った。当日の出席者は来賓として東京工大の山内学長を始め瀬戸名誉職にある河本礫亭、藤井修、藤井治郎、加藤舜陶の諸氏に同窓を合せて三十八名であった。尚よせ書の大皿は加藤舜陶氏の御好意で焼かれたものである(支部長名和二郎氏より)。

## 昭和五・六年卒の合同クラス会

昭和三十六年十二月九日夜、東京・港区高輪南町の幸楽で開催された。出席者は左記十四名であった。

昭和五年卒　永楽、尾関、佐藤功、佐藤実、鈴木、中山
同　六年卒　安芸、真保、田代、長崎、丹羽、松村、若林および招待宮川

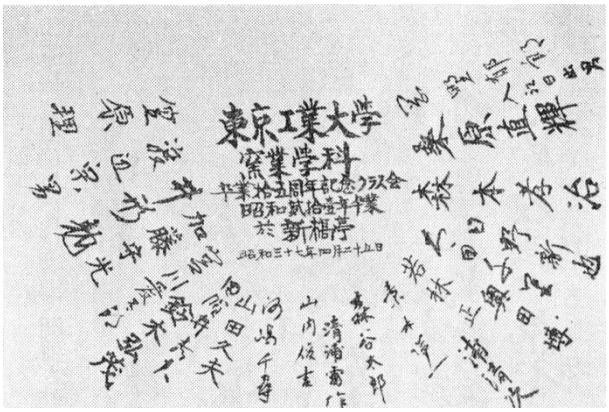
開宴前から話題はつきず、賑やかに盃をくみ交し盛会であった。

## 昭和二十一年卒のクラス会

昭和三十七年四月二十五日東京・新橋亭で開催された。

出席者　招　待――　山内、河嶋、森谷、清浦、山田、田賀井、素木、宮川の各教官
同　窓――　井形、入江、浦、岡野、奥田、加藤、笠原、桑原、鈴木、日野、森本、若林、渡辺、太田の各氏

開宴後各教官からのお話や自己紹介で現在の仕事や家庭のことなどが出てにぎやかに話し合い愉快な一時を過した。尚クラスの各氏から各教官へ金製のネクタイ止が贈られた。




昭和 21 年卒クラス会よせ書

## 総会と懇親会（昭和三十六年度）

昭和三十七年四月二十六日午後六時から東京・神田駿河台の山の上ホテルで開催した（本日より二十七日まで隣接の日本化学会講堂で窯業協会の講演会、総会があり二十八日には見学会があった）。

**総会**　田賀井常任幹事の司会で開会され、大野会長の挨拶、会務報告（宮川常任幹事・プリント配布）が承認された後、役員改選は森谷太郎氏が議長に推され審議の結果、正副会長は再選されたので大野会長から再選の挨拶あり。常任幹事は会長一任となった。

本会総会でのよせ書

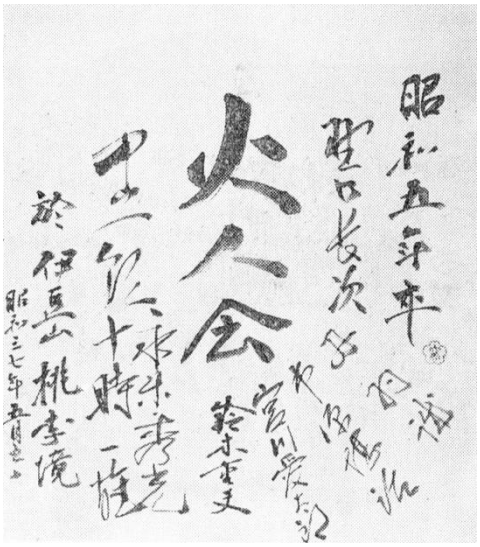
**卒業五十年**の安藤清、伊奈長三郎、吉沢篤二郎の三氏（明治四十五年卒）に大野会長から記念品目録（各務クリスタル製作所製クリスタル花瓶）の贈呈あり（代理に伊奈辰次郎、野口長次の両氏にうけて頂く）一同祝福の拍手を贈る。

次で山内工大学長から母校の近況が述べられ、総会を閉じた。懇親会は引続き同所食堂で九十五名が出席され盛会であった。尚この懇親会に大野会長と倉田副会長よりビール十ダース、及び山田精吾氏の御斡旋で日本硝子（株）より二ダースのそれぞれ御寄贈があった。厚く御礼申し上げます。

## 昭和五年卒のクラス会（火人会）

五月五日（土）伊豆山温泉の桃李境で開催された。

卒業以来一同心掛け乍らも相会する機会が少なく三十有二年は 夢の如く流れ去った。ここに何とかして丹羽君のお骨折で漸く今明日の連休に其の機会を得た。会場の桃李境は正面に初島浮び右手に伊豆山温泉郷を一望におさめる景色の地、部屋はツツジが満開の庭を通して静寂、ここに会する者 宮川先生、野口、十時、市原（名古屋より来場）、中山、永楽、鈴木、丹羽の諸君、談笑いつ果てるとも知らず、開宴と共に紅裙の来席にメートル更に上り 歌に舞踏に将又小唄のいきな音締めまで続出、実に愉快なクラス会であった。御欠席の榎本先生及び他の諸君には是非次回には御繰合せ御出席願いたい。尚火人会は在学中につけたこのクラスの名称である。（鈴木氏記、一部署）




昭和五年卒、クラス会寄せ書

## 大正十一年卒業四十周年合同祝賀会

六月二日（土）東京・蔵前工業会館で恩師、同窓が一二二名参加して盛大に行われ多大の感銘を与えた。開会前に記念撮影、次で余興などあり、

十一時頃から祝賀会が開かれた。司会者の開会の辞に次いで経過報告後、物故恩師、級友の霊に黙祷を捧げた。来賓の祝辞に移り山内工大学長欠席の為佐藤教務部長が代って述べ、恩師代表として加藤与五郎先生(九十一才)が壮者を凌ぐお元気さで一席述べられた。午後一時頃開宴に移行。恩師も会員も 四十年の昔に返り咲いて、若々しい友愛の空気にみち、談笑、談論堂を圧し、盛会裡に閉会した(記事、記念写真、よせ書は蔵前工業会誌十一月号参照)。

## 大正十一年卒クラス会

六月二日、前記蔵前工業会館で開催の合同祝賀会終了後、窯業のクラスは午後四時新橋発の臨時湘南日光号で湯河原へたつ。

大正11年卒のクラス会で

夕方会場の湯河原温泉・新山荘に落つく。参加者は石塚、河村、川村、斎藤、高橋、野村、松本、富里、市塚の諸兄と招待宮川の十名。

見晴しのよい部屋で浴衣に着替え入浴して茶でのどを潤し乍ら蔵前での合同クラス会から車中での話に引続いて話題はつきない。開宴ともなればきれい所のご入来で一層座が明るくなる。盃が重なる頃、隠し芸の唄などが出たが、高橋さんの能狂言は一同をして感嘆せしめた。十一時頃まで四十年前の学生時代に若返ってメートルは上る。級友ならではこの雰囲気は生れない。部屋に引上げると床がのべてある。アンマを二人呼んで順次もませ乍ら話はつきない。静かになった時は翌午前二時頃であった。

昭和23年卒のクラス会で

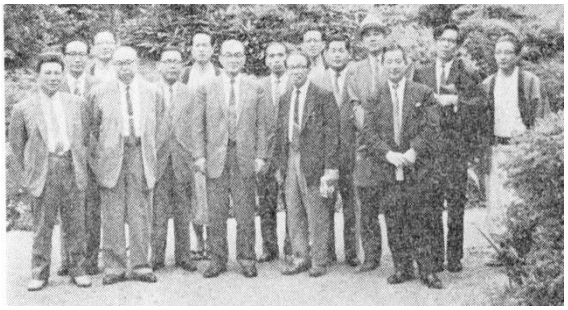
## 昭和二十三年卒クラス会

六月十一日 (月)午後六時 から東京虎の門の晩翠軒で開催された。

出席者は招待の山内学長と宮川、クラスの小野沢、大槻、芝原、中根、長岡琢、長岡為、浜野、福浦、山浦、牧村、升水、森、山本、横内の諸氏で大槻、浜野両氏が幹事役で挨拶の後開宴、乾盃後、各自の自己紹介で家族のこと勤先の仕事のことなどで笑を伴うなごやかな雰囲気となる。盃を重ねながら幹事の指名で宮川より謝辞と挨拶後、山内学長から諸君に対する仕事への態度、家族に対する思いやりなど時に笑を伴う訓話があった後懇談の形になり有意義なクラス会であった。

## 昭和二十二年卒業十五年クラス会

七月七日八日、箱根木賀温泉、東芝宮城野保養所にて開催された。



昭和22年卒クラス会を終えて
(長谷川氏写す)

出席者は招待、山内、河嶋、森谷、山田、田賀

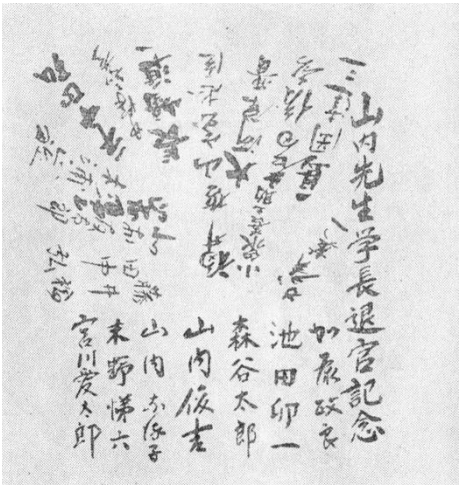
井、川久保、素木、宮川の各教官、クラスの上田、遠藤、塩田、柴田、菅沼、田中淳、田中博、土屋、長谷川、星野、松田、山下の諸氏。

東京からの参加者は七日午後四時と四時半の小田急特別急行で新宿をたった。夕方一同宿舎の各室に落着く。入浴して宴会までは各自つもる話で楽しく過す。やがて広間で開宴。山内先生を始め各教官のくだけた挨拶後、盃を重ね乍ら各自の自己紹介で現在の仕事のことやら家庭のことなど談笑のうちに進み、お酒がまわり愉快な雰囲気になる頃は新旧のうたやおどりまで飛び出してにぎやかなこと。クラス会は老若何れの雰囲気も変りなく楽しいものである。夜ふけて各自の室に引きとり、翌日解散した。幹事役のお骨折りを感謝します。

## 山内前学長を囲むクラス会

昭和三十七年九月十五日(土)午後五時から東京・新橋の蔵前工業会館で開催された。

去る七月三十一日附で山内先生が母校の学長を退官されたので先生の長い間の御苦労をねぎらう意味で、先生御夫妻をお招きすると共に、我々が学生時代に種々御指導を頂いた末野、森谷、宮川の諸先生にもお集り頂き、昭和十四年卒と昭和十六年後期卒が合同でクラス会を開いた次第です。先づ山本君から挨拶のあった後森谷先生の音頭で一同乾盃し開宴、山内先生は御在官中の感想の一端を述べられ、末野、森谷、宮川の諸先生は山内先生の御功績人柄などについて種々お話下さったので一同は今更乍ら山内先生の偉大なる御功績に敬意を表した次第です。クラス各自の自己紹介、近況、学生時代の想い出話などに花が咲き、極めてなごやかな内に時間もたち、その内ボツボツ酒がまわるにつれ益々話に活気を帯びて参りましたが、時間もなくなり他日会うことを約して解散した。(幹事記)




9月15日　山内先生を囲む
クラス会のよせ書

尚この席でクラスから島岡氏作の花瓶が記念に山内先生に贈られた。クラスの出席者は左の十七名であった。

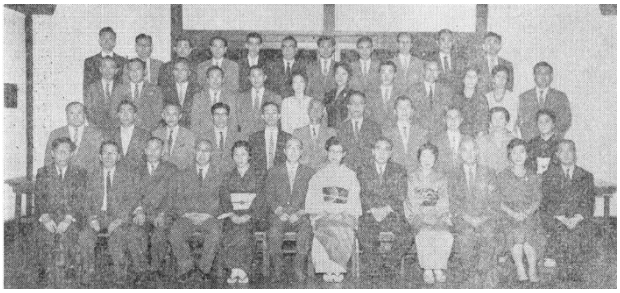
昭和十四年卒、池田卯一、井本俊喜、長崎準一、大河原晋、北村友太郎、杉浦正敏、平井正弘、福井哲、山本勇二、山室忠臣（楠井、対馬の両君は仕事の関係で欠席）

昭和十六年卒(後期)、加唐英一、加藤政良、小泉善之助、島岡達三、田中弘、中沢三知彦、藤井稔

## 山内先生の学長御退官謝恩会

九月二十八日、東京・文京区の椿山荘で学内外有志相寄り開催された。

この席には山内先生御夫妻をお招きし、先生長年の御苦労を感謝する目的で催されたものであるが、先生が工大学長を御退官後暑中休暇に入ったため少し遅ればせ乍らこの日が選ばれた。残暑も薄らぎ天候にもめぐまれ一同は三々五々庭内を談笑し散策した後、会食を共にした。会は田賀井先生の司会で、森谷、河嶋両先生をはじめ多くの方々から祝辞や感謝の辞が寄せられ、次で山内先生の謝辞と御経験談は感慨深いものがあった。先生御夫妻は御健康もいよいよ勝れられ、御宅も工大に近いことではあり、会は同窓会を思わせるような雰囲気で終始した。参加者は御夫人同伴も多く、出席四六名で盛会裡に終了した。(近藤記)



山内先生工大学長御退官謝恩会

## 東海支部例会

十月二十七日(土)午後、常滑市で開催した。今回は当地区の要望に応じて窯業講演会とし参加者の制限をしなかったので同窓会員四十名を含めて約一〇〇名の参加者がある盛会であった。

東海支部例会、参加会員
（常滑陶芸研究所前）

東海支部例会
（10月27日於常滑市）よせ書

山内先生御夫妻の御臨席を頂き、先生よりは「最近の窯業事情について」の貴重な御講演をきくと同時に、地元の八木虎雄氏より「古常滑について」日頃の御研究をお話し願い参加者一同感銘深くきいた。

陶芸研究所、杉江製陶所を見学後、当市の丸久旅館で支部の総会と懇親会にうつり、なごやかな語らいのうちに会を閉じたが、盛会であったことは会員一同の御協力によるもので喜びに堪えない。（大石支部長より）

## 昭和十六年養技第一回卒クラス会

十一月三日(土)昼頃から、東京・大井鈴ヶ森の円山で開催され、午後三時頃終った。

出席者は小松原将、呉子竜、四宮正善、竹沢義郎、浜島政治、福堂勇夫、増本秀敏、簑口滋人の八氏に宮川が招かれて出席した。

昭和16年養技第1回卒クラス会

この会は呉氏が日本視察団に加わって訪日されたので友情を温める為から増本、小松原氏がお世話されたようで、福堂、浜島、四宮氏などは遠方からはせ参じた美しい友情はうれしかった。欠席の諸君も同じ気持であり乍ら仕事の関係などで止むなく列席出来なかったと思う。卒業して二十二年になるのでそれぞれ主要な地位にあり、仕事のことや家庭のことなど話はつきない。楽しい時を得たことはお互に嬉しい思い出になることと思う。なお呉氏から台湾製のパナマ帽を私と稲生先生に贈って頂いた。私は今夏の暑い日に愛用したことを附記してお礼に代えます。（宮川）

## 昭和七年卒（工大第一回卒）各科合同クラス会

十一月十七日～十八日、熱海温泉の松島館で開催された。

卒業以来始めての工大第一回生全科合同クラス会が開催されたのである。何しろ第一回生は三十年前にバラックの校舎から不況時代に巣立った連中なので学生時代とは余程容ぼうや風格がちがっている。然し気持はチットモ変らないで、友情といい、若い気分といい永遠に尽きないものだ(中略)。会場で顔が向き合っても、どうも誰だったか、はっきりしない。紅顔の学生服時代とは違って皆リュウとした風ぼうであり、そろそろ、白髪がまじり、うす毛や肥、痩などの外観が三十年前とは丸きり、ちがっているので、用意の名札をドテラに付けた。

全国から参ずる者三十七名で第一回の人数からすれば大盛会である。先づ開宴に先だち、物故者の霊に黙祷を捧げる。懇親の宴ともなれば懐旧談やらかくし芸などで皆が渾然として一体となり、秋の夜長の更くるのも覚えず杯を重ねて歓尽きず又興尽きず脈々とした若き頃がよみがえって来た(後略)。

なお窯業の出席は岩崎郁夫、西田一雄、茂木今朝吉、森谷太郎 和田貞次の五氏であった(蔵前工業会誌、三十八年一月号参照)

## 昭四会(昭和四年卒業全科)例会

十一月十八日、岐阜市長良館で開催された。

参加者は二十六名で内窯業では大石信男、遠藤隆雄、加藤正之 田辺三郎、中尾竹次郎の諸氏(欠席は川畑、佐沢、吉浦の三氏)であった。

秋空の下、金華山を背に清流長良川のほとり、東西南北から集った昭四会の面々は昼過ぎから卒業アルバムを囲んで紅顔の美少年でありし頃を偲び乍ら楽しい語らいに旧交を暖めていた。ここ長良館は清流を眼下に見る山紫水明の地にレイアウトされ都心のスモッグに悩まされ明けくれている諸氏にはまことに有難い雰囲気である。

夜ともなれば名物の鮎料理に美酒、岐阜のきれい所に加えて大阪から遠征のたつみ会のおはし連と、一流とり揃えて宴は一入佳境に入る。今宵ばかりは同窓のよしみ、言いたい放題ぶちまけて気焔をあげる。又芸達者を自認する諸兄は、それぞれ熱演を振りまいて心残りなし。

最後は全員、手拍子、足拍子よろしく岐阜音頭をおどるうちにお開きとなった。(蔵前工業会誌、三十八年四月号参照)

## 大正十三年卒、各科合同クラス会

昭和三十八年一月二十八日午後五時半から東京・芝の中国飯店で開催された。当日の出席は三十三名で内窯業からは北村喜太郎、山内俊吉の両氏であった。

会は非常に盛会であった。なお会に適当な名前をつける話が出ていたので、参集の会員に相談した結果「大正十三年卒業だから 十(とう)三(さん)会はどうだろう」との提案に「とうさん」より「とっちゃん」の方がくだけて面白いとのことで「とっちゃん会」ということにまとまった。なおこのクラスは明年が卒業四十年になる。(蔵前工業会誌、三十八年四月号参照)

記念品贈呈式に於ける山内先生御挨拶

## 山内前学長御退官記念祝賀懇会

前工大学長山内俊吉先生御退官を機会に昨年七月頃より河嶋、森谷、大野の三氏が世話人代表となり学内関係教官が度々会合し「山内俊吉先生記念事業会」を組織し多数の発起人を御願し、発起人中より実行委員一〇〇余名を選出、更に実行委員より常任実行委員として大野、森谷、河嶋、田賀井、素木、稲生、境野、近藤、鈴木、宮川の諸氏を互選して先生の御功績を記念し、あわせて感謝の意を表する為の事業について多数の方々に御協力を御願い申し上げておりましたところ、個人、会社などから先生に対する御慰労の記念品代として多額の御醵金を頂き関係者一同、皆様の御協力に感謝しておりました。そこで四月六日(土) 十二時半から東京・赤坂のプリンスホテルに先生御夫妻並びに御家族を御招きして記念品贈呈式に次で祝賀懇親会を開催しました。

山内先生祝賀懇親会一風景

当日は田賀井氏の司会で先づ記念品贈呈式を行ない、森谷代表の挨拶、宮川より経過を報告した後、河嶋先生から記念品(目録)を贈呈した。次いで窯業同窓会長大野政吉、東京工大学長大山義年両氏の祝辞が述べられた後、山内先生の謝辞の御挨拶で式を閉じ、休憩後祝賀懇親会に移る。藤岡幸二氏の乾杯に始まり約二七〇名の出席者が各所で山内先生御夫妻を囲み懇談、盛会裡に会を閉じた。

なお本会開催に当り終始、境野照雄、近藤連一、鈴木弘茂の三氏が中心となり学科及び工材研教

職員の御配慮を感謝します。

（宮川記）

## 本会の総会と懇親会

昭和三十八年四月十九日（金）午後五時半から大阪市北区曽根崎上の北京で開催した。

**総　会**　田代氏の司会で開会した。先づ大野会長の挨拶に次で田賀井常任幹事の会務報告（プリント配布）あり、全員これを承認した。

**卒業五十年**（大正二年卒）の井上英吉、遠藤一夫、長野英造、青木俊郎の各氏に大野会長から記念品（辻晋六作花瓶の目録、現品は各氏宅へ直送した）が贈呈され、当日出席の遠藤氏の謝辞が述べられ、満場より祝福の拍手が贈られた。

**懇親会**　総会終了後引続き同所で五十余名の出席を得て開催された。藤岡先輩の乾杯で会は始まり、老若同窓が中華料理の卓を囲み歓談し、それぞれの分野で御活躍の方々のテーブルスピーチもあり、八時過ぎ大野会長の万才で目出度く会を閉じた。

なお懇親会開催に際しては左記の御寄贈がありました。厚く御礼申し上げます。（以下敬称略）

一、ビール五打　大野政吉氏　倉田元治氏
一、金壱万円也　品川白煉瓦株式会社
　　淡陶株式会社
一、金五千円也　大阪窯業株式会社　大阪窯業耐火煉瓦株式会社　黒崎炉材株式会社　九州耐火煉瓦株式会社
一、金三千円也　日本フェロー株式会社　日本化学陶業株式会社　丸石工材株式会社
一、金二千円也　美濃窯業株式会社

（以上梅田氏より報告）

末筆乍ら本会開催に当り終始御骨折を頂いた梅田夏雄氏、田中弘氏及び御関係の方々の御協力を感謝します。

総会における大野会長挨拶

懇親会風景

大野会長から卒業59年の記念品を
遠藤氏（うしろ向き）に贈る

総会及び懇親会出席者よせ書

## 大正七年卒の化学部合同クラス会

七月七日(日)に箱根湯本温泉の橘旅館で開催された。

当日の出席者は内田壮先生をお迎えして十三名が集った(内窯業卒は阿部庄司、荻島憲二、鈴木保雄、田山幹太郎の四氏)。

一風呂あびて浴衣にきかえ、夏の箱根の気分を満喫してくつろぐ。やがて一室に席を設けて内田先生を中心に宴が開かれた。各自己紹介で存分に話がはづむ。何しろ四十五年間の積る話だから尽くる処をしらず、仕事の話、家族の話、子供を通り越して孫の数に及ぶ。話す内に、飲む程に歌が出る。舞が出る。往年の元気ある気魄に満ちた若人らしい俤がそのまま再現されて七十前後の老人とは思いもつかぬ宴会となり、実に愉快なクラス会であった。

(蔵前工業会誌九月号の記事参照)

## 大十二会(大正十二年卒)卒業四十周年記念大会

五月十九日(日)午後二時から東京、文京区の護国寺に於て御遺族も御迎えして故人になられた恩師(窯業では熊沢、芝田、近藤の各先生)及び同窓(窯業では浅川、相沢、内田、馬渡の諸氏)の追悼法養会が執行され、出席の恩師、御遺族、同窓の焼香があり御冥福を御祈りした後別室で追憶懇談会が催された。

大12会記念写真(於椿山荘)

午後五時頃から近くの(関口台町)椿山荘で記念パーティ(謝恩会)が開催された。開宴前に庭園で記念撮影があった後、会場の席につく。幹事の御挨拶後、御指名により出席恩師十二名からそれぞれの思出話があり、クラスの方々からも四十年前の若い頃の思出など談笑の内に宴はにぎやかに進み、盛会裡に意義ある追悼会と宴会が終了した。実行委員の方々の御骨折りを感謝します。

なおクラスの皆様から恩師に記念品として各務クリスタル製作所製の見事なクリスタル硝子鉢が贈られた。厚くお礼申し上げます。(宮川)

詳細な記事は蔵前工業会誌十月号を参照されたい。

## 授賞会員

編輯者の知る範囲につき記載もれの節は御容捨願います。

**昭和三十六年**

以下三氏は熱管理功労者として通産大臣より表彰された。

小島豊之進氏(昭和二年卒・日本碍子株式会社)
大石信男氏(昭和四年卒・日本陶器株式会社)
岩崎郁夫氏(昭和七年卒・三菱化成工業株式会社)
長崎 勧氏(昭和六年卒・九州耐火煉瓦株式会社)
は十一月に科学技術功労賞を授賞された。

**昭和三十七年**

倉田元治氏(大正十四年卒・旭硝子株式会社)は四月十六日に科学技術功労賞を授賞された。

下記両氏は四月二十七日の総会席上で窯業協会技術賞を授与された。

倉田元治氏(大正十四年卒・旭硝子株式会社)
水野茂樹氏(昭和十年卒・東芝炉材株式会社)

**昭和三十八年**

大石信男氏(昭和四年卒・日本陶器株式会社)は四月十八日開催の窯業協会総会席上で同会より技術賞を授与された。

長崎 勧氏(昭和六年卒・九州耐火煉瓦株式会社)は日本化学会より化学技術賞を授与された。

山内俊吉氏(大正十三年卒・前東工大学長・名誉教授)は十月二十一日藍綬褒賞を授与された。

## 学　内

**昭和三十七年**

二月一日付で鈴木弘茂氏(昭和二十一年卒)は助教授に昇任し原子炉研究施設へ配置換になった。

四月一日付で素木助教授が無機材料工学科主任に任命された。

四月一日付で滝沢一貴氏(三十七年三月、大学院博士課程卒)は助手(森谷研究室)に任官した。

四月十六日付で助教授素木洋一氏および、七月十六日付で助教授川久保正一郎氏は共に教授に昇任した。

七月一日付で下平高次郎氏(工材研助手)は退職し、群馬大学工学部助教授として、また、赤尾洋二氏(昭和二十三年卒、森谷研助手)は退職して山梨大学工学部助教授として赴任した。

七月三十一日付で山内先生は工大学長として四年間の任期を修了され、大山義年新学長にバトンを渡された。御苦労様でした。

十月一日付で、河嶋教授が工業材料研究所長として三年間の任期を終了したので選挙の結果、森谷太郎教授が所長に就任された(学部教授が兼任となる)。

長谷川泰氏は十二月十六日付で助教授に昇任後十二月三十一日付で退官して、セントラル硝子(株)研究所へ転任した。

**昭和三十八年**

**工業材料研究所事務長更迭**

一月一日付で事務長及川信次郎氏は千葉大学医学部附属病院管理課長に配置換になり、同日付片岡利正氏(文部省大学学術局教職員養成課)が事務長に昇任された。

**無機材料工学科(窯業)四年生名簿**(卒業論文指導教官室名)　[住所は略]

色川秀勇(川久保研)　五十嵐卓章(森谷・境野研)　植松伸二(素木研)　宇佐美保(斎藤研)　木戸雄二(森谷・境野研)　後藤誠史(近藤研)　斎藤武四郎(川久保研)　俵余志夫(森谷・境野研)　立花寛一(素木研)　内藤嘉春(河嶋研)　森川日出貴(岩井研)　山岡信夫(斎藤研)

**大学院学生名簿**(指導教官室名)

伊藤三喜雄(森谷研)　福長 脩(河嶋・斎藤研)　駒田英治(佐多研)　高橋紘一郎(森谷研)　山岸千丈(森谷研)　井関孝善(田賀井研)　沖川伸司(斎藤研)　山根正之(森谷研)

四月一日付で左記それぞれ任命又は任官された。

境野助教授が無機材料工学科主任に任命された(昨年度素木教授)

木村脩七氏(大学院博士課程卒)は助手に任官された(原子炉研究施設鈴木研究室)

小磯晴通技官(工材研)は助手に任官された。

中　俊、大矢真吾、大場立夫、山本孝子の各技術員は文部技官に任官された。

## 工大の学科と系

現在の工大は下記の学科と研究施設があり、いくつかの学科がそれぞれの系に属している。無機材料工学科と金属工学科、繊維工学科は材料工学系に属している。

学科名＝数学科・物理学科・化学科・応用物理学科・金属工学科・繊維工学科・無機材料工学科・化学工学科・工業化学科・高分子工学科・応用電気化学科・機械工学科・生産機械工学科・制御工学科・経営工学科・電気工学科・電子工学科・建築学科

系名＝理学系・材料工学系・化学工学系・機械工学系・電気工学系・建築系・人文系・

なお研究施設系に原子炉研究施設と印刷技術研究施設がある。

附置研究所＝資源化学研究所(所長、森川教授)・精密工学研究所(所長、中田教授)・工業材料研究所(所長、森谷教授)

工大の無機関係の学部、工材研の施設、研究関係の記事は窯業協会誌八月号「教育機関(大学)めぐり」を参照されたい。

## 工大の実験工場地帯の改築

工大も逐次学生の増員などで研究室や講義室などが足りなくなったので本館西側の新館、その他が建てられているが、昨年度から本館裏に立ならぶ工場をとりこわし東棟、南棟、中棟、北棟の各新館が出来ることになり、昨年度には東棟(地上四階、五三二坪)と南棟(地下一階、地上五階、二二八九坪)が本年五月頃完成した。本年度は北棟を建てる為去る八月頃から電気の工場と電化工場の一部がとりこわされ目下工事中である。この新館は地上六階建で三〇〇〇余坪の内本年度は一八〇〇余坪が建てられるとのことである。中

棟予定地の紡織工場は取こわし費が嵩むとかでしばらく見送られるらしく、窯業工場は当分の間残るようである。

## 東京工業大学・綜合研究館建設について

東京工業大学における綜合研究を推進するに必要な綜合研究館を建設する目的をもって寄附金を募集中であることは御承知のことと存じますが、左に構想の一部を記して皆様の御協力を御願い 申し上げます。

建物四一三一坪余の鉄骨、鉄筋コンクリート造り、(地上六階、地下二階建、冷暖房、昇降装置共)、敷地は本学構内・所要資金は八億円で、これが寄付金の総額になっております。

寄付金は広く一般法人および個人で現金又は有価証券とし、お申込みは本学内・東京工業大学綜合研究館建設事業資金募金会宛で、御払込みは振替口座・東京六三四九四番又は左の銀行が取扱指定になっておりますので、この本支店へ御払込み願えますと自動的に本会の定期預金に繰入れられます(カッコ内は取纏店)。

三和銀行(渋谷支店)、住友銀行(田園調布支店)、第一銀行(五反田支店)、日本勧業銀行(五反田支店)、富士銀行(自由ヶ丘支店)、三井銀行(目黒支店)、三菱銀行(自由ヶ丘支店)、横浜銀行(大岡山支店)、住友信託銀行(新橋支店)、三井信託銀行(大森支店)、三菱信託銀行(渋谷支店)

この募金会は昭和三十六年八月、当時山内学長が中心となり、学内教官、学外同窓(蔵前工業会)其他の関係者によって組織し 活動を開始しましたが、時恰も経済界の不況で現在に及んでおります為募金は困難で去る九月現在の御申込みは約三億一千七百万円であります。なお個人の内学内教官(講師以上)の御寄付は署月給の四〇%を目標とし、各賞与から四回(二年)に分納して頂くことになっており、御申込みは現在三百八十余万円になっております。助手級の方々へも応分の御願いはしてあります。御関係の会社及び個人の方々へ御協力方を御願い申し上げます(募金会 経理・宮川)。

## 学 位 論 文

佐藤純夫氏(昭和九年卒)「マスコンクリート用ポルトランドセメントに関する基礎研究」

稲生謙次(大正十三年卒)「焼成石膏の風化現象に関する基礎的研究」

赤尾洋二(昭和二十三年卒)「化学工業に於ける圧縮抜取試験に関する研究」

大庭宏(昭和二十年卒)「ドロマイト煉瓦に関する基礎的研究」

滝沢一貴(昭和三十七年、大学院博士論文)「デビトロセラミックスに関する研究」

木村脩七(昭和三十八年、大学院博士論文)「アルミナーシリカゲル共沈物の高温相変化に関する研究」

## 昭和三十六年度収支決算報告書

**収入の部**

| | |
|---|---|
| 収入総額 | 三八〇、八二〇円 |
| 内 訳 | |
| 前年度繰越金 | 四三、八一五円 |
| 事業寄附金 | 一、八〇〇円 |
| 名簿広告料 | 三三四、〇〇〇円 |
| 預金利子 | 一、二〇五円 |

**支出の部**

| | |
|---|---|
| 支出総額 | 二七六、五〇三円 |
| 内 訳 | |
| 卒業五〇年(前年度四名)記念品代 | 一二、四九五円 |
| 各簿広告依頼関係諸費 | 一〇、一七〇円 |
| 同 トレース・凸版代 | 二二、九九五円 |
| 名簿印刷費(一〇〇〇部)一六一、一四三円 | |
| 同 発送諸費 | 三一、一九〇円 |
| 同 編輯関係諸費 | 一五、〇〇〇円 |
| 総会・懇親会関係印刷費 | 八、五〇〇円 |
| 同 送料・返信ハガキ代 | 一三、二五〇円 |
| 雑 支 出 | 一、七六〇円 |
| 差 引 | |
| 次年度へ繰越金 | 一〇四、三一七円 |
| 以 上 | |

昭和三十七年四月二十六日

なお三十六年度総会・懇親会は名古屋で開催され、記事は前回の会誌第六号に記載してあるが、この会は一切を東海支部でお世 話下さったので関係収入・支出は本部の帳簿にのせませんでしたので収支決算も上のようになりましたので御了承願います(宮川)

## 昭和三十七年度収支決算報告書

**収入の部**

| | |
|---|---|
| 収入総願 | 二〇八、〇二〇円 |
| 内 訳 | |
| 前年度繰越金 | 一〇四、三一七円 |
| 懇親会々費(九五名) | 九五、〇〇〇円 |
| 名簿広告料延納一口 | 七、〇〇〇円 |
| 事業寄附金一口 | 一、〇〇〇円 |
| 預金利子 | 七〇三円 |

**支出の部**

支出総額　一五二、四六四円

内訳

前年度総会・懇親会諸費　一二七、二七三円
卒業五十年(三名)記念品代　九、五〇〇円
会議費及雑支出　三、一九一円
総会、懇親会(大阪)通信費　一二、五〇〇円
差引
次年度へ繰越金　五五、五五六円
以上
昭和三十八年四月十九日

**事業寄附者芳名**(敬称略、順不同)

昭和三十六年度分(会誌六号報告以後)
一、〇〇〇円　鈴木　保雄
五〇〇円　越前谷民雄
三〇〇円　佐沢　光雄

昭和三十七年度分
一、〇〇〇円　市塚　年

昭和三十八年四月以降の分
一〇〇、〇〇〇円　山内俊吉
一〇、〇〇〇円　品川白煉瓦株式会社、淡陶株式会社
五、〇〇〇円　大阪窯業株式会社、大阪窯業耐火煉瓦株式会社、日本フェロー株式会社、九州耐火煉瓦株式会社、黒崎炉材株式会社
三、〇〇〇円　日本化学陶業株式会社、丸石工材株式会社
二、〇〇〇円　美濃窯業株式会社、遠藤一夫
一、〇〇〇円　吉沢篤二郎、田賀井秀夫、井上英吉、鮎川武雄、宮内準五郎、佐々木健介、鈴木保雄、福井　哲、真保義郎、青木俊郎、原田親信、倉田　貢、田上嘉秋、森谷太郎、河嶋千尋、素木洋一、清浦雷作
七〇〇円　山田久夫、川久保正一郎
五〇〇円　小林作平、厚見昌弘、中村　厚、水野茂樹、茂木今朝吉、田代　仁、古丸　勇、梅田夏雄、宮川愛太郎、稲生謙次、境野照雄、佐多敏之、斎藤進六
三〇〇円　田村忠臣、中村周清、三沢賢一、岩切一良、大牟礼勝、渡辺　明、新造　昇、近藤連一、毛利純一、安田晋三、福田篤治郎、藤井正雄、吉見恒雄、内藤　繁、中山恒彦、拓植信雄、枡本　賜、村瀬六郎、中村恵一、居上英雄、山本　広、油田恒夫、松本三則、石原幸正、川村新太郎、斎藤三二、髙橋久男、松本昌蔵、渡辺文平、浜野健也、宇田川重和、大津賀望、鈴木弘茂、岩井津一、宗宮重行
二〇〇円　辻村　実、篭橋久衛、成田　正、草場知喜、田畑勝弘、深田　義、綿谷政治郎、稲村泰、辻　晋六、久富豊実
一五〇円　今間朋春、速水多根雄、中川邦好、滝沢一貴、木村脩七
一〇〇円　江川弘水、日下部中治、子安一義、小島　宏、開田髙生、中西誠治郎、市川光昭

なお大野政吉(会長)及び倉田元治(副会長)両氏からは懇親会ごとにビールの御寄贈を頂いている。

## 会員訃報

左記の方々は前号記載以後に御遺族や同窓より御通知のあった方々です。
物故された方々に対しては生前の御功績を感謝し御冥福を御祈り申し上げます。

木下末太郎(大正九年卒)　昭和三十五年五月歿
時枝定太郎(大正五年卒)　同　三十六年九月二十一日歿
渡辺　綱一(　同　)　同　三十七年八月一日歿
今井　雄吉(昭和十六年技卒)　同　三十七年九月歿
佐藤　実(昭和五年卒)　同　三十七年十一月十五日歿

五十鈴隆吉（大正十年卒）
同　三十七年十一月二十一日歿
寺崎　厚治（昭和七年卒）
同　三十七年十二月二日歿
成合　富徳（大正十一年卒）
同　三十八年一月十八日歿
鈴木　鋹吾（大正十五年卒）
同　三十八年一月二十三日歿

## 板谷波山（嘉吉）先生御逝去

十月十日御自宅で結腸ガンのため逝去さる、享年九十二才でありました。

先生は明治五年に茨城県下館市のお生れで、長じて東京美術学校木彫科を卒業された後、石川県立工業学校教諭当時から陶磁器の製作に御転向されました。陶芸家としての先生の御功績は実に偉大なものがあります。昭和九年に帝室技芸員、二十五年に芸術院会員に推され、二十八年には文化勲章を受章されております。

先生は本学の前身東京高等工業学校の初期に嘱託として明治三十六年九月から一ヵ年、次で明治三十九年一月から大正二年七月まで窯業科で教鞭をとられておりました。

同窓一同は先生の御逝去を悼み、生前の御功績を感謝し、御冥福を御祈り申し上げます。

## 編集後記

○会員及び窯業関係の皆様にはいつも御健やかで窯業界の発展に御活躍のことと拝察し大慶に存じ上げます。

本会の名簿も隔年発行のため御住居、勤務先などの移動も多く常時心にかけて訂正してはおりますが、完全なものにはなっていないかと存じます。編者の切望するところは毎年の総会・懇親会に往復ハガキで御通知して御返事を御願いしておりますが、本年大阪で開催された場合も八二〇余通出しましたが御返事を頂いたのは四五〇通足らずでした。全員御返事を頂きますと訂正し易く、また正確を期することが出来ると思います。

明年は私も満七十才になりますので、今後名簿の編集をどなたにやって頂くにしましても前記の返信を一〇〇％送って頂きませんと名簿の発行は難しいことになるかと存じます。また資金の面でもいつも広告による御援助によっておりますので今後御引受け頂く方も苦労することと存じますが、今年は山内先生始め事業御寄附が相当ありましたので心強く存じております。宜敷く御協力願います。（宮川）

昭和三十八年十一月五日　印刷
昭和三十八年十一月十日　発行
編集兼発行人　宮川愛太郎
発行所　窯業同窓会
東京都目黒区大岡山一番地
東京工業大学内
振替口座東京一九六八五五番
印刷所株式会社　技報堂
印刷者　大沼正吉